

## 国際NGO「サポートボランティア」に関する考察

中部学院大学人間福祉学部

宮嶋 淳

### Study on “Support volunteer” for International NGO

#### summary

This paper is research on the volunteer who supports NGO in Japan and Vietnam.

This research is analyzing the volunteer action why have been continued “Support volunteer” by my interview survey and field survey.

This research clarifies the feature of the volunteer action what call “Support volunteer” by me.

The conclusion of this paper is as follows.

1 To strengthen “Good experience” of volunteer actions and to sublimate “Bad experience”, and to make “Good memory”, communication with people is important.

2 Experience gained by a volunteer action will continues strengthening and maintaining the volunteer’s intention regardless of a physical distance and a cultural difference, if there is an opportunity to carry out a volunteer activity.

#### Key words

International Non-governmental Organization, Support Volunteer, Vietnam,  
Interview survey

## I. はじめに

NGO(= Non-governmental Organization の略。非政府組織) という用語は、国連の経済社会理事会から生まれ、開発途上国の貧困問題に取り組む国際協力 NGO や地球環境問題に取り組む環境 NGO、平和協力や人権問題に関わる NGO など、関わる問題ごとに役割区分がなされている(森田:2014)。NGO が関わる諸問題は国境を越えた圏域でその問題の解決に当たる必要があるケースが多く、活動の舞台そのものが国際化している。これを踏まえて、国際 NGO とは国境を越えた活動を行なう NGO と定義する。代表的な日本の国際 NGO には、「シャプラニール=市民による海外協力の会」「シャンティ国際ボランティア会(SVA)」「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(SCJ)」「日本国際ボランティアセンター(JVC)」「ワールド・ビジョン・ジャパン」「日本国際民間協力会(NICCO)」などがある。国際 NGO と呼ばれるこれらの組織は、いずれも国内での活動を行なうとともに「国境を越えて活動する」という特徴を有している。

本稿における国際 NGO とは、ベトナムにおける貧困問題、とりわけストリートチルドレンとその家族の問題に取り組む、ベトナム・ホーチミン市に拠点を置く FFSC (=ストリートチルドレン友の会; FRIENDS FOR STREET CHILDREN) をさす。同 NGO の設立関係者である吉井(2009)の著書『立ち上がるベトナムの市民と NGO ストリートチルドレンのケア活動から』においては同組織を「ローカル NGO」と呼んでいる。しかしながら、同 NGO はベトナム国内で活動するとともに、アメリカ・フランス・日本など同国以外の地域とのつながりを持って、「国境を越えて活動する」という特徴を有している。この特徴に着目して本稿では FFSC を国際 NGO に該当するとらえている。

本稿における国際 NGO とは、国境などの空間的・物理的な圏域や距離を超えて活動を行なう NGO 組織と定義する。

本稿は、ベトナム在住時から FFSC をサポートし、

帰国後も同 NGO を支援し続けているボランティア個人とその活動に着目した。そして同 NGO をサポートし続けているボランティア個人がどのような体験のもとで、そうした思いを持ち続けられているのかを分析していく。本稿では、このような NGO をサポートするボランティア個人とその活動を「サポートボランティア(活動)」と称し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

## II. 研究の視点と方法

### (1) 研究の視点

本稿は、日本とベトナムという物理的距離=国境を越えてなお、ボランティア活動を続けているサポートボランティアに焦点をあて、その個人がなぜボランティア活動を継続しているのか、何を志向しているのか、国境を越えたサポートボランティア活動の意義と意味をどのように見出しているのか、など国際 NGO に対するサポートボランティアの特徴を発見することをめざした。管見では、NGO 研究はこれまでも多くなされてきたが、NGO を支えるボランティアの志向に着目した研究は稀であり、その意味において本稿は、ボランティアの志向に焦点をあてること自体にオリジナリティのある研究であると考えられる。そのような位置にある本研究では、国際 NGO を支援するサポートボランティアに欠かれない特徴及びそれにかかる要素・要因・背景を現地調査とインタビューから探索的に抽出することをめざした。

サポートボランティアに重要な特徴として、筆者は「若者が社会に出る前に1年程度のボランティア活動を体験することが望ましい」という言説(A・エチオーニ:2001)を支持し、母国を離れて体験される文化的「Gap」の意味と意義に注目した。したがって本稿の仮説は、ある一定程度の期間、母国を離れて文化的な「Gap」のある中で、何らかの活動を行なうことは、人としての高次な自己成長、あるいは自己実現の機会となり、さらには生き直しの機会として意味と意義があるに違いないというもの

である。したがって、人間としての自己成長は、一定程度期間の「経験」と母国を離れた文化的な「Gap」がある中で、ある行為としての「ボランティア」を行なうことにより得られる可能性があると考えた。

## (2) 研究の方法

報告者は、次のような研究方法を用いた。

- ①フィールド調査：2012年8月並びに2014年9月にベトナム・ホーチミン市を訪問し、FFSCの活動を参与観察並びにフィールドワークにより調査した。この方法は、文化人類学というフィールドワークの手法を参照し、参与観察者である報告者の感覚と記録・記憶、関心に基づき、日本人ボランティアへのインタビュー項目を構成する際に活用した。
- ②インタビュー調査：現地で活動する日本人ボランティアに2014年9月にインタビュー調査を行った。さらに2014年11月、東京都内のホテル・ラウンジで日本における連絡窓口を務めるボランティアにインタビューを行った。
- ③テキスト、コンテキスト分析：②で得られたインタビュー・データを用いてテキストの形態素分析、コンテキスト分析をIBM SPSS Text Analytics for Surveys4.0により行なった。
- ④文献レビュー：①～③により得られた結果が何を意味するのかを、探索的に考察するため、先行研究のレビューを行った。

## III. 倫理的配慮

文献調査については、その出所を明記する。フィールド調査並びにインタビュー調査においては、電子メールで①訪問の目的、②質問項目、③データの管理方法を提示し、アポイントをとり、了承を得た。また、写真撮影と使用においては、FFSCスタッフの立会いのもと、当該家屋の主人より口頭で許可を得ている。インタビュー調査当日においては、許諾文書を双方で確認し、発言の録音とデータ化、並びに写真撮影の許可を得た。さらに完成論文を確認いただき、公表についての同意書を得た。

## IV. 調査の結果

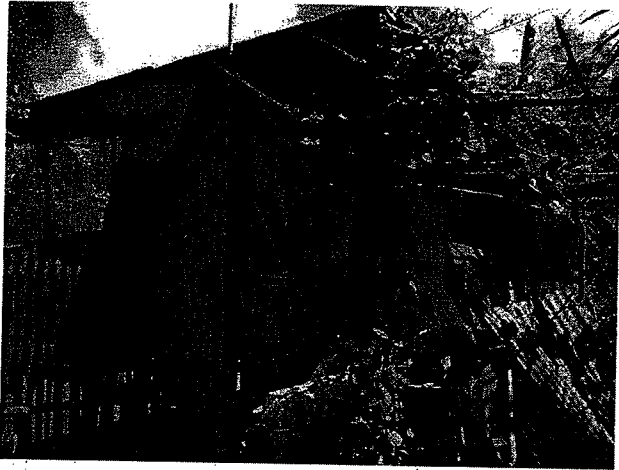
### (1) フィールド調査の結果

FFSCが交流を持っている国・地域は、ベトナム国内のみならず、アジア（中国、韓国、日本、フィリピン）や欧米（アメリカ、フランス）である。FFSC本部入り口付近にはマザー・テレサが同会を訪問した際の記念写真も飾られていた。具体的な民間交流としては、石川県のユネスコ協会をはじめ、大学（沖縄大学、東京工業大学、三重大学、早稲田大学など）、短期大学、専門学校、岡山の歯科団体、欧米の会社、日本の企業（ホンダ）、日本国内のNPO（大垣市翠耀会）など、多数の団体との定期的な交流が行われている。

写真①は、2012年8月現在のホーチミン市の状況であり、写真②は2014年9月に訪問したFFSCが支援する子どもを取り巻く環境である。室内は約十畳一間で子どもの勉強道具、家財、衣類が雑然とおかれ、床の下は池になっている。水は池からくみ上げ、トイレはなく池に排泄する。写真からも明らかのように「開発格差」（吉井：2004）がホーチミン市近郊で進んでいることがわかる。貧しい家庭とその子どもたちの姿が、市民の知らぬ間に隅に追いやられ、社会から排除されようとしている。FFSCの支援は、子どもたちを中心としつつ、親の教育と就労の支援にも注がれている。また、ホーチミン市には農山村地域からの流入する貧しい人々が後を立たず、FFSCの噂を聞きつけ訪れる、支援を求め人々が後を立たないという。



写真①：ホーチミン市中心部



写真②：FFSCが支援するホーチミン市近郊の家庭

## (2) インタビュー調査の結果

①ベトナムでの活動：週2～3日・3年間、複数の日本人ボランティアとのローテーション、日本の

里親さん向けの広報活動、訪問客への通訳・案内。

②日本での活動：里親さん等からの「問合せ」への対応、本部（ベトナム）への連絡、ビギナーへの対応。

③FFSCのボランティア・システム：現地で採用されるサポートボランティア同士が帰国後、連絡を取り合うということはほぼなく、米仏ともつながりは薄い。ボランティア・システムとしては「希薄なネットワーク（弱い紐帯）」である。ベトナムのストリートチルドレンを支援する各国の里親間のつながりも薄く、日本の里親が高齢である傾向も加味し、現地を訪問する里親もそれほど多くない。「弱い紐帯」でありながら、それを維持し続けられる要因は「ベトナム戦争」という記憶と「子どもらの成長」という証と喜び、そして「無理のない

表1 インタビュー・データから抽出されたカテゴリー①～ベトナムでの活動～

パターン	カテゴリー	具体的物語
良い	賞賛	ベトナムの人々は、笑顔で話しかけてくれたり、親切で素晴らしい。物価は安くて、授業料は無料。
	楽しい	食事はおいしいし、子どもたちと遊ぶ場もあるし、観光も豊か。
	感謝	日本の企業は、会社の利益を寄付し、活動をバックアップ。支援に対しては、スポンサーシップカードを渡し、全身全霊で感謝の意を伝えている。
	嬉しい	日本の里親さんからは、毎月3,000円を頂戴し、その35%を奨学生支援に使わせてもらっている。スタッフの給料も払えるようになった。
	好き	ベトナムに来て、ベトナムの人々を好きになり、何もしないのはモッタイナイと思い、ボランティアをしている。
悪い	批判	ストリートチルドレンを見かけなくなった背景に、施設への収容政策がある。
	悪い	教育を受けられない子どもたちが、将来、また失業し、間違いを繰り返すのではないか。まだまだ公務員の不正があり、警官の態度は横柄で、そうした環境は嫌な面だ。ベトナムに来て、関心もち、活動を始めてみると、子どもたちが可愛い。そんな子どもたちが、ストリートで家庭を支えるために働き、勉強できないのはおかしい。
	恐怖・後悔	ひたたくりに狙われて、かばんをとられたことがある。油断したのが悪かったと後悔した。
	凶報・ショック	ひたたくりをしたのはホンダのバイクに乗った子どもだった。その子らは一度も学校に通ったことがなかった。
その他	要望	子どもたちには学校を続けて欲しいが、続かないことが多い。それでもめげずに里親さんには支援を続けて欲しい。里親さんや学生さんには、ベトナムで見たこと・体験したことを「引き受け」て、現状を知らない人々に広げて欲しいし、またベトナムに来て欲しい。

出典：筆者

表2 インタビュー・データから抽出されたカテゴリー②～日本での活動～

カテゴリー	サブカテゴリー
人	わたし/自分、子ども/あの子、親、みんな、ボランティア、友達
支援	金/3,000円、センター、手紙、連絡、活動、訪問、継続
気持ち	つらい時

出典：筆者

負担（月額3,000円）」であると語られた。

(3) テキスト&コンテキスト分析の結果

インタビュー・データを用いてテキストの形態素分析、コンテキスト分析を IBM SPSS Text

た認識は、帰国後も保持され、表2と3のようにカテゴリー化できる語りに結びついている。

表2と3は、日本に帰国したサポートボランティアへのインタビュー発話の分析から得られた結果

表3 サポートボランティアの語りの「志向性」

パターン	サブカテゴリー	細目
良い	褒め・賞賛	立派、一番いい、きれいな文字
	良い	ボランティア、仲良い、寄付、助け、良いことがある、続けてくれる、優しさ、便利、なおす、いいことを言う、面白い、楽しい
	感謝	おかげで勉強ができました
	対応への賞賛	スタッフはすごい良くて
	嬉しい	喜び、励まされました、助けられた
	好き	好き
悪い	悪い	困っている、不満、残念、悲しみ、返答なし、苦しい、批判、悪い、怒り、不安
その他	その他	驚き、要望、疑問、提案・忠告、問い合わせ、お願い

出典：筆者

Analytics for Surveys4.0により行なった。テキストを入力後、カテゴリー分析及びそれに伴うパターン分析を行なった結果、表1～3が得られた。

ベトナム・ホーチミンで活動する日本人サポートボランティアから得た発話により表1が得られた。彼女は当地で「良い/悪い」機会に直面し、その中でボランティア活動を続け、現地ボランティアの役割として「その他」を語ってくれた。

表1におけるパターン「良い」をみると、ベトナム現地で出合った「人」との良好な関係が「支援」という行動に結びついている。一方、パターン「悪い」では、自らが現地で経験した「悪い」と感じられる出来事が、国の政策と子どものあり様と結びつき、子どもへのまなざしとして強化されていることがわかる。すなわち、ベトナムでの「良い/悪い」経験が、サポートボランティア個人の中で、構造的に認識化され、現在の「支援」という行動につながっていると考えられる。ベトナム現地で構造化され

である。表2をみると、構造化された認識は「気持ち」というカテゴリーで抽出でき、「人」との関係と「支援」という行動に結びつく。日本での活動は、ベトナムで構造化された認識をベースに「人」と「支援」を仲介していることを意味するだろう。

表3では、現地における「良い経験」が「悪い体験」を昇華させ、FFSCのスタッフや日本の里親さんたちとのコミュニケーション・つながり感が彼女の活動への志向性を支えているとしかいえないのではないだろうか。

V. 考察

(1) FFSCの「サポートボランティア」の特性

本調査で得られた結果の概略を図示し、サポートボランティアの発話をその図上で構成させると、図1のようになる。

ベトナム在留中の「良い経験」と「悪い体験」を昇華させる人間関係とコミュニケーション・つなが

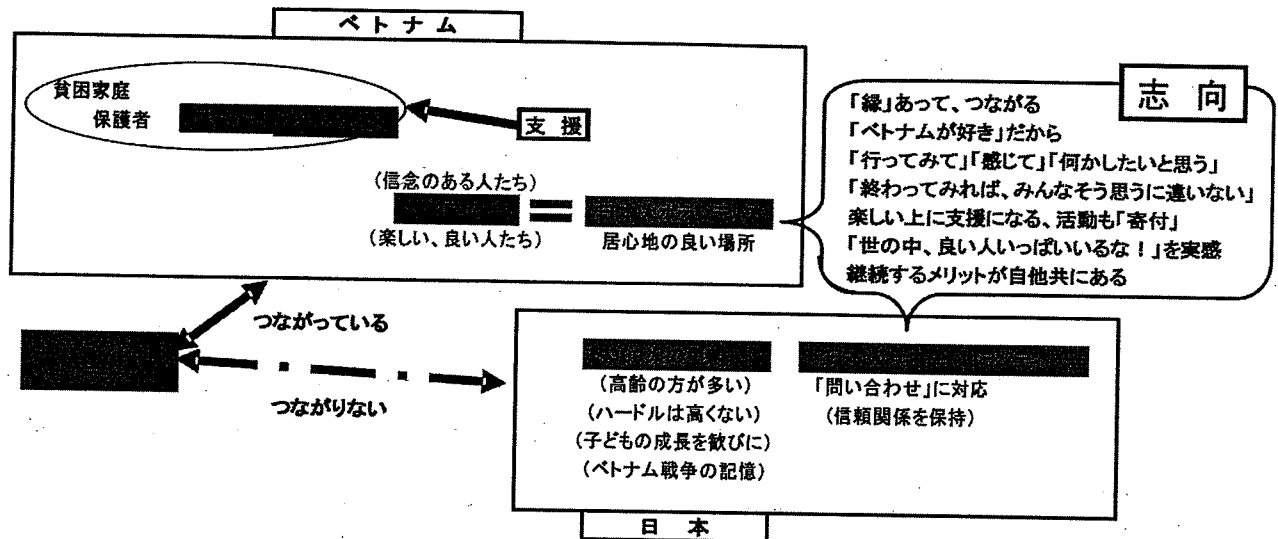


図1 日越両国でサポートボランティア活動を行った日本人ボランティアの経験と志向 出典：筆者

りが「善い記憶」となって、日本でのボランティア活動を継続させる原動力となっていると考えられる。それは、図1の中で「志向」と整理した吹き出し中の発話とつながっている。

## (2) ボランティア「志向性」に関する考察

入江 (1999) によれば「人々がボランティア活動をするとき、その背後には・・・それを支えている思想がある」としており、ボランティアは「自発性・無償性・公益性などをそなえた行為だ」とされる。ボランティアの条件や特徴についての議論は (1) 個人のボランティア活動の条件、(2) ボランティア団体の条件、(3) ボランティア団体のスタッフの条件を区別してなされなければならないとしている。入江の見解を支持し、ここではボランティア行為の性質・特性や主体者のあり様に着目し、研究を進める。ここで着目したのは、ボランティア行為の性質・特性としての「志向性」とそれを保持する主体についてである。なぜ「志向性」なのか。従来から議論されてきたボランティアの主な性質・特性には上記の3つのほか、「創造性、先駆性、発見性、ネットワーキング、継続性、専門性」などがある。これらについては既に多くの研究がなされており、守本 (2013) が「ボランティア活動の3つの性格 (自発性、社会性、無償性) に揺らぎが見えてきた」と述べ

る考察を行なっているところに着目した。「志向性」とは何か。「志向性」とは、フッサール (2012) の現象学用語で、意識は常に何者かについての意識であることを表し、「何者か」という対象への認識は、実在そのままではなく、志向性によって構成される。志向性とは、対象に対する主体の、思い入れによって生じる方向性なのである。このように定義できる「志向性」という性質を援用することによって、柏木 (1996) の「ボランティアは好きだからやる」という主張や早瀬 (1994) の「ボランティアは恋愛に似ている」に対する明確な応答が出来る可能性があるのではないかと。

近年の人工知能や心の哲学において「志向性」は論争的となっている主題であり、機械には決して成し遂げられないものが「志向性」であると主張されている。この主張を援用すれば、「志向性」に依拠したボランティア研究は、「ボランティアの本質は人間性 (人間力) である」を、探求することになる。サール (1997) は、「志向性とは、世界内の対象や事態に向けられ、あるいはそれらに関わり、あるいはそれらについて生じているような、多くの心的な状態ないし出来事の特長である。」と定義している。そして「志向性」の特性は、①いくつかの心的な状態ないし出来事だけが志向性を有しているのであって、信念、恐れ、希望、願望などが志

向的であり、神経過敏、得意、対象なき不安などは志向的ではない。②志向性は意識と同じではない。③「意図」は様々な「志向性」の一形態にすぎない、と述べている。そして志向的状态とは「信ずる、恐れる、望む、欲する、愛する、憎む、忌避する、好む、・・・などのように、本質的に何かに向けられているか、あるいは・・・何かに向けられていることが可能であるか、のいずれか」だとしている。つまり、「好ましい方向性」が存在する。ボランティア活動が何らかの対象に向かってなされる行為であることに異存はないだろう。その方向性を「志向性」として考察を深めていくと「好ましさ」は欠かせなくなるのだ。

サール (1997) はまた「志向的状态と発話行為の類似点」や「発話の心的方向性」についても考察しており、「志向的構成要素」とその順序が「視覚(経験)→記憶→意図的行為→先行意図」ではないと主張している(先行意図とは、何かをしようと意図して、それを表象すること)。このことは記憶が行為に直接、直結するものではないことを示しており、ボランティア個人の志向性は何らかの「良い(善い・好い)」刺激により行為化されると理解できる。すなわち、本調査においてはベトナム FFSC のスタッフや日本の里親さんたちとのコミュニケーションやつながり感ということになる。

### (3) 議論の解を得るための「GAP」への着目

サール (1997) は「自由意志」を脳の中に位置づけることができるのかを考察し、「ある時間 T1 において行為者の心には信念や欲求があり、それは続くある時間 T2 において行為として実現されるので、T1 と T2 のあいだにある飛躍 (Gap) を、実際の脳の物理的なプロセスのなかにどのように位置づけるのか」を問うている。ボランティアが人間性に基づくのであれば、「人はなぜ自主的自発的にある対象に向かって行為するのか」を説明し、それが飛躍 (Gap) を経てもなお、志向されることを実証しなければならないだろう。

この議論においては「GY (ギャップイヤー)」に関するわが国に動向が参考になると考える。ギャップイヤーとは、東京大学が秋入学を開始した際「空き期間」の有効活用を行うための概念として紹介したことにより、わが国での認知を得、文部科学省の政策としても採用されている。この概念を普及させるための実践・研究を行なっている一般社団法人日本ギャップイヤー推進機構協会 ([http](http://)) によれば、ギャップイヤーには「親元を離れた国内外留学」「インターン」「ボランティア」の 3 要素があり、それらを約 4 ヶ月～1 年間に渡り経験すると、「就労・社会体験機能」並びに「修学機能」が向上するとされる。また同協会の理事長である砂田 (2012) は、ギャップイヤーの効用を①バーンアウトや中退率の低下、②入学後の目的意識の明確化、③就業力の向上、④職業観の醸成、⑤社会的課題の克服力の向上、とまとめている。そして鬼頭・原 (2013) は、ギャップイヤー経験者に、ギャップイヤーの 6 つの評価指標「①実務的なスキル・知識、②人・社会とやっていく力、③自分でやっていける力、④進路・目標の明確化、⑤社会への考えや価値観、⑥人生に生きる人脈」でアンケートを行い、各項目の得点が向上していることを明らかにしている。さらに開澤 (2013a) は、「ギャップイヤー」の概念を「人生」にまで広げると、「古今東西、無数の人々が様々な形で行なってきた」チャレンジであり、社会にとって必要不可欠なツールであると述べている。

開澤 (2013b) は、「ギャップイヤー」の議論には①場所は問わないが、「異質な体験」が伴うこと、②自分の意思で行うこと、③一定程度の長さで腰を落ち着けて行なうこと、④環境整備や経済負担の軽減等制度化が必要であること、の 4 つの論点があるとしている。

報告者はこのようなギャップイヤーの動向を踏まえると、サールのいう飛躍 (Gap) については、未だ筆者の主観的な域を出ていない一見解にすぎないが、検証可能な現象の 1 つとして、人間特性という枠組みの中で議論できそうに思えるのである。

## VI. 結論

日本在住のインタビューの発話を再ストーリー化すれば、次のようになる。

ベトナムに夫の仕事の関係で行くことになり、はじめの半年は現地を満喫した。その後、遊び疲れて、現地の友達がほしくなり、たまたまボランティアと出会った。そこで出会ったスタッフが信念のある、楽しい、やり深い人たちだった。そこは私の居心地の良い場所になった。

「縁」あってつながり、ベトナムを「好きになった」。「行ってみて」「感じて」「何かしたいと思う」。ボランティアをしてみた人は皆そう思うに違いない。日本に帰ってきてボランティア活動をするのは、それも「寄付」だと思っから。そして「楽しいうえに、支援になる」から。「世の中、良い人がいっぱいいるな！」を実感できるから、活動を継続するメリットが自他共にあると思う。

本稿の結論は、国境を越えて体験した「良い経験」は、「悪い体験」を昇華させるような人々とのコミュニケーション・つながりを媒介として「善い記憶」として長く保持される。この記憶化された体験は、その記憶を構成した体験を想起できる状況（関係者とのコミュニケーション・つながり）に人間を居続けさせられるならば、物理的距離や文化差（Gap）とは関係なく、人間の志向を強化・維持しつづけられる可能性がある、というものである。

したがって、「良い記憶」と「Gap」体験との重層化は、人間の志向をより強化するものとなり、生涯にわたる忘れがたい長期記憶となり、同体験に向かう個人の志向性を強化させるとともに、その体験で得たスキルは永続させられる可能性がある。したがって「サポートボランティア」の志向性は「良い記憶」と「Gap」体験の重層化により、持続性を確保することが示唆されたと考える。

なお、本稿は2015年度日本社会福祉学会中部ブロック春の研究集会において口頭発表したものを加筆・修正した。また、中部学院大学特別研究助成：

2013年度「東アジアにおけるソーシャルワーク教育に関する研究」を得て行なった研究の一部である。

## 資料

### 東京でのインタビューの概略

Q1：FFSCのことを知ってボランティアを始められることになったきっかけと経緯は？

A1：2001年にベトナムに初めて行き、それまでストリートチルドレンのスの字も知らなくて、主人の仕事で行って、初めて町で「物売り」っていう子どもを見て、初めて知ったんです。もう何か全部「飽きちゃったな」「何かしなくちゃいけないかな」と思った時に、「ボランティアならいいのかな」と思って探し始め、日本人婦人会ってというのがあり、ボランティアを募集されていたので応募しました。ベトナム人の友達も欲しかったし、「ベトナムのことをもっと知りたかった」ので、何か面白いかなと思って始めました。

Q2：ボランティアをやろうというのは、ベトナムの印象が良かったから？

A2：もちろんそうです。何か「役に立ちたい」というと、おこがましいですけど、「何かできるかな」というのと、あとやっぱり自分がまだ「何かできるのに、何もしていない」ということが、何て言うか「もったいない」というか、そういうのがすごくあってやりたかったのです。

わたしは結構、知りたがり屋なので、あちこち行っただけ、もっと行ってないところへ行ってみたくとか、ベトナム人と「もっと深く付き合いたい」とかって、物売りの人だけじゃなくて「友達が欲しい」とって思って、かな。事務所のスタッフはすごい良くしてくださって。知り合い程度の人もいっぱいですけど、でもシスターハンとか、何もしなかったら絶対会えない人たち。あと子どもたちも。知らないで帰ってきたらもったいないかな。

Q3：実際にボランティアは何年間、やられていたの



ですか？

A3：2003年に始めて2006年に帰ってきたので、3年間。わたしはこの活動が「寄付」っていうか、その経費を寄付しているようなつもりで、子どもたちへの奨学金は出してないのですけど。子どもたちに毎月、里親さんは月3,000円を送金される。年に3万6,000円、10年で36万円。成人するまでって考えれば、結構、大きいです。大きくなるまで見ていただければ、大学に行けるようになる子もいるし、自分で自立できる子もいる。結局、負の循環、親が貧乏だから子供も貧乏っていうそういう循環の中から出してあげるためにすごく意味のある支援になるので「お願いします」と言います。

Q4：応援してくれている人たちっていうのは、「現地に行こうかな」みたいなことを思われている人が多いのですか？

A4：行く人は1割もいないのではないですか。結構、里子からのお手紙で「励まされました」っていうお手紙をわたしがいただくのです。里親さんから。支援する人も心の支えにしている人が多いですよ。自分を信じているっていうところが何か、生きがいていう人もいらっしゃるから。手紙がうれしかったとか。そういうつながりが、何か「すごい、うれしい」というか、普通に暮らしていると善意ってあんまり見えないじゃないですか。これをやると人の善意がすごく見えるというか、世の中に「いい人いっぱいいるな」って、そういうふうに思える。

Q5：現地から遠く離れた日本で「個人ボランティア」を続けておいでになるエネルギーの源は？

A5：継続するメリットが自他ともにあるという感じですかね。事務局にとっても役に立っているだろうし、自分でも。結局、わたしがいると便利っていうのが理由かな。わたしが一番よく分かっているんで、こういうことしてくれる人がいる。それだから、それは「いたほうがいいだろう」って思えるのと、あとわたしも「ベトナムが好きだから、

かかわっていたい」っていう気持ちと、あと「いい人いっぱい知り合いにでき、それが楽しい」っていう感じです。

Q6：現地で一番感じたことは？

A6：向こうで一番思ったのが、お金を持っている、何かに使ってほしいって思う人は、結構申し出がある。受け手としては、「これに使いたいだけれど」っていうニーズがあります。ピンチュウセンターは、すごく立派ですけど、ほかのセンターはもう壁もないし黒板もない。もっと何か支援したいけども、結局、地域の事情で目立ったことができないっていうジレンマがあって、一番やりたいところにお金がかけれなかった。

Q7：ベトナム独自のあり方みたいなものが「原動力」なんですか？

A7：一番困ってそうなアフリカとか、困っている国いっぱいある。だけど、自分がどうしてベトナムを支援するのかなって思えば、やっぱり「縁があったから」としか思わない。みんなそれぞれ「縁がある」ところとやればいかなって思います。「何でベトナムなんだ」とか「何で日本なんだ」とか、「なぜそこがモデルなんだ」とか、そんなことを気にするのは面倒くさい。それはもう「出会ったから」としか言いようがないです。やっぱ、行って見て感じることもあると、「ああ、何か助けてあげたい」とか思いますものね。資料を読んでも「ピンとこない」というか。行く前から頭の中で考えちゃう人に対しては無理。これはもう何か本当に不思議なことで、自分が嫌なことがあったりつらいことがあったりした日に限って、ボランティア先で良いことがあるのです。何か誰かがすごいいいこと言ってくれたり、すごく優しくしてもらったり、不思議でした、すごく。だからもう何だろう、それでベトナム。結構、わたし、つらい時があったんですけど、ボランティアしていたことで続けられたっていうか、助けられたというか、不思議でした、本当に。もうつらい時に限って良いことが。不思議、本当に。だから、み

んなそうなのかなって。つらい時ほど人の優しさが「身にしみる」っていうのはあるかもしれない。

日本ではやっぱり里親さんからの、お礼のお手紙をもらったりしたときが多いですかね。お電話、もらったり。そうですね。いつもそうでした。だからボランティアを続けていたのかな。嫌な思いをすることはなくて、いつも良いことがある。やってみないと分からない。体験してみないと。人に「何かしてあげたい」という気持ちをお持ちの方が多。お金持ちだから寄付しているのじゃなくて、結構、年金の中からとか、「結構苦しいんですよ」とか言いながらやっている人のが多いです。そういう人って少ない中からでもあの子のためにちょっと出すっていうのが喜びっていうか、そういう人が多いかな。何て言うのだろう、終わってみれば、みんなそう思うに違いないと思う。

Q8: これからもずっと続けていけるだけ続けていくという感じですか？

A8: ほかにやりたい人がいたら、「代わってあげたほうがいいかな」とか、ちょっと思っているのですけど。いっぱい向こうでボランティアしていた人で帰ってくるので、もしかしてやりたい人も、わたしみたいに「つながりたい」とって人もいるのかなって、ちょっと思っ。

Q9: 今後の活動とか事業とか、思うこと考えることとか何かありますか？

A9: ストリートチルドレンが減るのが一番いいと思う。施設の充実は、寄付を辞めなくなる人が増えるので、本当に必要かどうかというところは見えにくくなってきちゃうかなっていうのも思います。

## 文 献

- アマタイ・エチオーニ／永安幸正監訳 (2001) 『新しい黄金律』麗澤大学出版会
- エトムント・フッサール／浜渦辰二・山口一郎訳 (2012) 『間主観性の現象学 その方法』ちくま学

## 芸文庫

- FFSC (FRIENDS FOR STREET CHILDREN)  
(<http://ffsc.exblog.jp/>) 2015. 6. 2. 検索
- 早瀬昇 (1994) 『元気印ボランティア入門』大阪ボランティア協会
- 入江幸男 (1999) 「ボランティアの思想－市民的公共性の担い手としてのボランティア－」内海成治、入江幸男、水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社、pp4-21
- 一般社団法人日本ギャップイヤー推進機構協会  
(<http://japangap.jp>) 2015. 7. 31. 検索
- ジョン・R・サール著／坂本百大監訳 (1997) 『志向性 心の哲学』誠信書房
- 森田哲也 (2014) 「国際 NGO の包括的なアカウントビリティと組織構造」『キリストと世界』24、pp80-102
- 守本友美、吉田忠彦編著 (2013) 『ボランティアの今を考える』ミネルヴァ書房
- 開澤真一郎 (2013a) 「これからの社会へ ギャップイヤー推進の是非とめざす社会」ギャップイヤー・プラットフォーム「ギャップイヤー白書」編集委員会 (2013) 『ギャップイヤー白書』p. 31
- 開澤真一郎 (2013b) 「望ましいギャップイヤーとは？ 4つの論点から！」ギャップイヤー・プラットフォーム「ギャップイヤー白書」編集委員会 (2013) 『ギャップイヤー白書』p. 30
- 柏木宏 (1996) 『ボランティア活動を考える』岩波ブックレット
- 砂田薫 (2013) 「ギャップイヤー導入による国際競争力を持つ人財の育成」『留学交流』12、1-12
- 吉井美知子 (2009) 『立ち上がるベトナムの市民と NGO ストリートチルドレンのケア活動から』明石書店
- 吉井美知子 (2004) 「都市化 お金持ちから不法滞在者まで」今井昭夫、岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための 60 章』明石書店、pp147-150